

2022 年度自己点検・評価活動（教学部門）の総評

大学評価室長

大学評価委員会委員長 川上忠重

はじめに

ポストコロナ禍での「学びの質」向上に向けた 2022 年度の自己点検・評価活動は、当初の予定通り、全基準の点検・評価項目および評価の視点に対して行われた。各部局等から提出された「自己点検・評価」シートの総頁数は 1,500 頁を優に超えており、ここであらためて、2022 年度の自己点検・評価活動に対する各部局の尽力に対して、心から謝意を表したい。「総評」では、今年度の自己点検委員会の方針と大学評価委員会の評価計画に基づき、各部局による自己点検・評価および大学評価委員会による評価結果から、各学部および大学院等の取り組みについて、特に、「2021 年度大学評価委員会の評価結果への対応状況」、第 4 期認証評価においても、本学の学習成果を基軸に据えた内部質保証の重視とその実質性でのポイントとなる「内部質保証」、「教員・教員組織」、「社会貢献・社会連携」の組織的な取り組みに関する評価結果を受けてコメントしたい。また、今回の「総評」では、紹介できなかった各部局での優れた取り組みについては、2022 年度自己点検・評価報告書（教学部門）を参照、ご活用いただければ幸いである。なお、本総評は、教学部門（学部・インスティテュート・機構・大学院・研究所）の自己点検・評価に関するものであり、経営部門、事務部門に関する総評は、別途、2022 年度の大学評価スケジュールに従って行う予定である。

1. 2022 年度の自己点検委員会の方針

今年度、自己点検委員会において策定された「2022 年度自己点検委員会 基本方針」は、以下の通りである。この方針に基づき、教学部局は自己点検・評価を自ら行い、その内容を大学評価委員会教学部会が客観的に評価作業を実施した。

(1) 「ポストコロナ」を見据えた教育の質保証と自己点検・評価の在り方の検討

今回の「With コロナ」での経験および自己点検評価で得られた本学での特色ある知見に基づき、あらためて、各部局との連携と効果についても視野に入れながら、本学での「自己点検・評価」活動について十分議論していく。

(2) 全学質保証会議の位置づけの再確認と各種課題への対応

2020 年度大学評価委員会経営部会で自己点検・評価の主体の育成や教育マネジメントの構造的な問題等についてご指摘をいただいたことで確認された「全学的な内部質保証システムの実質化」や「オンライン・オンデマンド授業を軸とした教育の質保証」等の課題について、今後の本学での「全学質保証会議」を基軸とした各種課題への提案を進める。

(3) 2019 年度認証評価結果への対応

- a. 長所として挙げられた事項のさらなる伸長を図る。
- b. 概評で対応が求められた事項及び改善課題として挙げられた事項について、改善のための対応を継続していく。

2. 各自己点検・評価項目に対する今後の展望について

(1) 2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況について

本学の特色ある自己点検・評価活動の1つとして、外部評価委員からも高く評価いただいている前年度の大学評価委員会の評価結果への対応があるが、ここ数年、大学評価委員会の評価結果への対応による実績および効果も蓄積され、年度毎の各学部等における内部質保証としての役割を十分に担う効果が、さらに得られつつある。次のステップとして、単年度のみならず、継続的な対応状況の確認に対する検討が必要である。

(2) 内部質保証について

COVID-19 に対する本学での対応については、多くの関連部局での対応および連携により、すでに数多くの遠隔・オンライン教育においても実績が積み重ねられており、その経験を踏まえた対面での正課・正課外教育へのアクティブ・ラーニングを含むフィードバックも行われていることは、今年度の第1回自己点検懇談会での話題提供や大学執行部および学部長等のグループワークからも明らかであろう。ただし、COVID-19 に対する対応は、本学での「全学質保証会議」をはじめとする関連委員会との連携は不可欠であり、第4期認証評価に向けた「土台作り」を、各部局と連携しながら着実に推進することが肝要である。

(3) 教員・教員組織について

2019（令和元）年度の本学に対する大学評価（認証評価）では、教員・教員組織に関する項目において、「教員の資質向上及び教員組織の改善・向上に向けた取り組みも適切に行われていると判断できる」との言及が概評にも記され、提言では長所として、本学の「学生による授業モニター」や「学生が選ぶベストティーチャー賞」も評価されている。本学での長所は、2022年度の「自己点検委員会」の方針（3）-aにあるように、長所の伸長も極めて重要であるが、多角的な視点から新たな取り組みの「掘り起こし」も必要である。この点について、全学質保証会議のタスクフォースを中心に検討をお願いしたい。

(4) 社会貢献・社会連携について

本学における社会連携・社会貢献に関する方針では、「社会全体の市民教育に貢献し、民主的で力強い持続可能社会を創造する」という方針の下、研究成果の社会への還元、企業・地方自治体・地域社会との連携、国際社会との連携・協力、校友ネットワークの世界展開および社会連携・社会貢献の適切性に対する点検・評価が掲げられている。当然、研究成果の社会への還元では、学部および大学院のみならず、研究所の担う役割は非常に重要であり、研究所間のネットワーク強化を目指した「自己点検懇談会」も検討すべき時期と考える。

3. 次年度に向けた課題

2022年度の自己点検・評価活動の結果を踏まえて、本学における2021年度大学評価委員会の評価結果への対応状況、内部質保証、教員・教員組織および社会貢献・社会連携に関する今後の展望についてコメントさせていただいたが、本学における、さらなる「教育の質」向上に向けた2023年度以降の課題について、以下に付言しておく。

(1) 大学評価委員会の評価結果への各部署での対応による「成果の可視化」

本学では、前年度の大学評価結果総評に基づき、各学部・大学院等の評価結果への対応状況について「自己点検・評価シート」での確認が毎年行われている。「ピア・レビュー」の観点のみならず、定期的な各部署等の客観的な評価は、本学の自己点検・評価活動の特徴の1つであり、組織的な大学および各部署での協働による運営面を含めた体制となっている。今年度の大学評価委員会からの評価結果においても、各部署の優れた取り組みや長所・特色が数多く評価されている。ただし、基本的に前年度の大学評価委員会の評価結果への対応状況の把握が主目的であるため、評価結果に対する検討や次年度に向けた各部署の取り組みの予定の記述に留まっているものもあり、優れた各部署の施策・計画やそれに基づく「具体的な成果」が、一部見えにくくなっている部分があることは否めない。大学評価委員会の評価結果の作成は、大学評価委員会での対応となるが、負荷が掛かる部分でもあり、各部署のそれに基づく成果も期待される場所である。これまでの本学での自己点検・評価での経験値を最大限に生かしつつ、より一層の「成果の可視化」を意識した各部署での対応を期待したい。

(2) 「全学質保証会議」を核とした各部署との連関による内部質保証体制の構築

本学における第二期中期経営計画では、組織・運営体制の強化の取組施策の1つとして、「全学的な内部質保証システムの実質化」を骨子とし、全学質保証会議を中心としたPDCAサイクルの実質化とその点検・評価が到達点として示されている。2019年度の本学に対する大学評価（認証評価）結果でも、内部質保証に関して、「全学質保証会議」を中心とする内部質保証システムの適切性についての点検・評価の定期的な実施が望まれている。本年度は、2020年度から引き続き（2年毎）、全学的な内部質保証に関する検証・改善への取り組みについて、大学評価委員会（大学評価G）による外部評価も予定されている。すでに「全学質保証会議」内においては、タスクフォースによる次年度に向けた課題・問題点に関する検討も行われており、次年度に向けた本学における「内部質保証」のさらなる「質向上」が期待される場所である。ただし、全学質保証会議を中心とする内部質保証体制の構築には、各部署との連関による、より一層の大学全体としての「成果の可視化」を念頭においた、組織運営と効率化を図る必要があることは言うまでもない。第4期認証評価では、学習成果を基軸に据えた内部質保証の重視とその実質性についての評価が重視されることも予想されており、単に認証評価のためでなく、より「学生」の学習成果の評価にむけた全学質保証会

議を核とする内部質保証体制の中長期を踏まえた組織的検討およびそれに伴う全学質保証会議の体制や成果に関する継続的な自己点検評価をお願いしたい。

(3) 自己点検・評価活動のさらなる充実に向けた評価方法の検討と効率化について

本学での教学部門（学部・研究科等）の評価＜教学部会＞は、「水準評価」（大学基準協会の定める評価基準（評価に係る各種指針を含む）および前年度の大学評価委員会評価結果の総評での指摘事項を中心に評価する）と「達成度評価」（自己評価及び大学評価結果への対応状況、年度目標に対する達成状況、改革・改善の進捗状況等）を評価する）の観点から行われている。本年度は、次期認証評価に向けた準備として全基準の点検・評価項目および評価の視点に対して実施した。「水準評価」は、各評価項目について部局としての取り組みの成果、特色および問題点を振り返る自己点検・評価として重要な部分であるが、今後の1つの方向性として、大学としてのビジョンを踏まえた、特色ある本学としての戦略的・組織的な自己点検・評価活動への一部シフトを、導入すべき時期を迎えていると思われる。今後の認証評価制度の充実に向けては、中央教育審議会大学分科会等においても、「大学教育の質的転換を推進するための評価の在り方」がまとめられているが、3つのポリシーを起点とする「内部質保証」に関する自己評価部分と「学生の学修成果」の各部局との連携による継続的な把握と分析による「質向上と効率化」がポイントであろう。全学質保証会議および大学評価委員会等において、「水準評価」および「達成度評価」を踏まえた、大学としてのあるべき年度目標と「自己点検・評価に関するビジョン」を提示し、さらに、認証評価サイクルを踏まえた効率化についての組織的検討をお願いしたい。

4. おわりに

本学での自己点検懇談会（学部、大学院および事務部門）においても、コロナ禍を含めた数多くの部局の特色を生かした活動や成果が報告され、大学執行部と学部長等によるグループワークによる今後の方向性も、テーマは限られているが情報共有されている。

文部科学省を初めとして、次期の大学教育の質的転換・質保証を踏まえた認証評価制度の改善・充実に向けた検討が行われ、個々の大学の教育目標の実現の有無や大学が設定した目的・水準を評価する「達成度評価」の重要性も一部、指摘されている。他方で、実際の評価結果を改善につなげる仕組みや評価の効率化の「実質化」の部分についても検討が行われており、今後の第4期認証評価に向けた改善・充実が期待されることである。大学での「質保証」の担保には、認証評価の役割がさらに重要になることは明白である。ただし、当然ながら、内部質保証への「組織的な体制」創りや学生アンケート、コースナンバリング、ポートフォリオ等の評価ツールの利用や学習成果の測定が目的ではなく、それらに伴う「学習成果の向上」が共通した目的の根幹である。多様化する「教学マネジメント」において、本学での「内部質保証」の長所・特色を生かしつつ、各部局とのさらなる連携による自己点検・評価活動の一層の充実化と効率化を切に願っている。

以上